九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

モンテーニュと東洋の悟道

成瀬，正一

https://doi.org/10.15017/2557044

出版情報：文學研究. 16, pp.17-30, 1936-07-28. 九州文學會
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

モンテーニュと東洋の悟道

成瀬　正一

本稿は成瀬教授が、カーン財團派遣員として巴里滯在中、一九三五年五月二十二日、巴里大學講堂に於て行はれた講演"Montaigne et la Sagesse d'Extrême-Orient"（モンテーニュと東洋の悟道）の邦譯である。佛語原稿は、巴里大學日本研究所（Université de Paris, Institut d'Etudes japonaises）の「研究と講演」（Travaux et Conférences）の第二輯（一九三五年）として刊行せられてゐるが、更に近く九州帝國大學法文學部創立十周年記念論文集に、掲載せられる豫定である。

本稿は成瀬教授の逝去後、前記「研究と講演」に掲載せられたものから、邦譯せられたのであるから、譯文に就ての責任は全部譯者が負ふものであることは勿論である。

譯文中、モンテーニュの隨想錄からの引用句に就ては、關根秀雄氏の譯文（白水社）を拜借し、ルソーの懺悔錄のそれに就ては、石川戲庵氏の譯文（岩波文庫）を拜借した。（飜譯擔當者　進藤誠一）

永き歴史と光輝ある過去とに充ちたる貴大學の中心に於て、今お話を始めるに當りまして、私は内心先づ、怯れと恐れとの感情を禁ずることができません。第一に、これからお話致しますモンテーニュはフランスの文人であります。第二に、お聽き下さる皆様は、フランス人の中で最も高き教養を持たるゝ階級に屬せられる紳士、淑女であります。然るにこの私は、久しくフランス文化に對して、最大の尊敬と關心とを培つて居るものではありますけれども、ま

た永らくの間、特に好んでフランス文化の研究に從事して居る者とは申しながら、所詮、地球のかなたの端から參つた一外國人、自國語ならぬ言語の困難と闘はねばならぬ一外國人に他ならないのであります。かくの如き題目に就て、かくの如き條件の下にお話をしようなどゝ申すことは、殆んど無謀と申すべきでありませう。日本で好んで用ひます諺に「釋迦に說法」といふのがあります。その意味は、"prêcher au Bouddha"といふことでありまして、佛陀の如き大賢者に說教を試みようとする、愚者の無分別な努力を嗤つたものであります。私の立場もこれと同樣ではあるまいかと恐れざるを得ません。然し、我等のモンテーニュはその「隨想錄」の中で、謙虛な態度で申して居るではありませんか。

『わしは、低い・輝きのない・生活をお目にかける。それは結局同じである。處生哲學は、平民の私生活の中にも、それよりずつと充實した生活の中にも、全く同じやうに見出される。人は、それぞれ、人間的性狀の完全なる形を、藏してゐる。世の著作者達は、何等かの特異なる徵によつて、人々に、自己を傳へる。わしこそ、わしの全體によつて、卽ち、文法家・詩人・若しくは法律家・としてゞはなく、唯ミシェル・ド・モンターニュとして、自己を傳へる第一の人である。』

果して、モンテーニュの明言して居ります通り、彼が自己を語る時、それは同時に全人類を語つてゐるのであると致しますならば、傳統、風俗、習慣、人種等は一々異つて居りましても、人類といふ大家族に屬する者との立場から、彼の記述の中に、私達自身の面影を見出すことも、或る意味に於て、許されるのではありますまいか？　かやうに考へましてこそ、私は"prêcher au Bouddha"の危險を冒す氣になつたのであります。

先づ最初に、モンテーニュが私の國の教養ある人々に、不思議に人氣があるといふ事實に、皆樣の御注意を向けて戴

きたうございます。佛語、佛文學に關係のある者は措きましても、專ら英文學を研究する人々の間にさへ、かなりの愛好者を持つてゐることは確かであります。一六〇三年に出版せられましたジョン・フロリオ（John Florio）の有名なる飜譯は、日本に於て讀者を持つて居ります。現に私も、今から十餘年前、倫敦滯在中に、友人の一人から、その一部を購つて至急送るやうとの依頼を受けましたことを、記憶致します。のみならず、最近日本から屆きました新聞紙は「隨想錄」の和譯の出版を豫告して居ります。その曉には必ずやモンテーニュ愛好者の數を激增せしめるに相違ございません。これ等の事實から歸納しまして、モンテーニュの思想と、私共の國の傳統的精神との間に、或る共感が存在するものと考へることができるかと思ひます。こゝにその一例を擧げることをお許し願ひます。日本の古典の中に「隨想錄」と同じ部門に屬する著作があります。表題を「徒然草」と呼びます。その意味は"le Cahier d'oisivetté"といふのであります。この書物は十四世紀の前半に現れたのでありますが、主として、著者がひねもす見聞したことを、とりとめもなく記述したものであります。この筆者の內的態度、彼が日本文學史に於て演じて居ります役割は、モンテーニュのフランスに於ける運命と、實によく符合して居りますので、私共は彼を日本のモンテーニュと呼びたくなるのであります。彼は書物の冒頭に於て次のやうに述べて居ります。

『つれ〴〵なるまゝに、日ぐらし硯にむかひて、心にうつり行くよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそ物狂ほしけれ。』

この一節は日本の凡ての教科書に載せられて居ります。私は今もなほ、高等學校で教授からこれを說明せられた日のことを、またそれから幾年かの後、「隨想錄」の、「無爲に就て」の章の中に、偶然これと對をなす一節を發見しまし

た日のことを記憶して居ります。私は異國に舊知を見出した思でありました。寧ろ、その一節を皆様御自身お聽き願ひませう。モンテーニュは、筆を執る計畫の生れた次第を敍して次のやうに申して居ります。

『先頃わしは、自分に殘れる僅かの余生を靜かに獨り離れて送らう、それ以外のことには努めてかゝりあふまい、と決心をして、この住居に隱退したのであるが、その時わしは、この自分の精神のためには、之を全き無爲の中におき、之をして專ら己を思ひ、己にかゝずらひ、己の内に晏如たらしめるのが一番ぢや、それに增す愛撫はあるまい、と思うたのである。今は自分の精神も漸く年をとつたから、昔よりは幾分重厚にもなり圓熟もして、より容易にかくなすことを得るだらうと、思うたのである。處がわしは、

無爲ハ精神ヲアラユル方ニ追フ。

が故に、それが、却て放れ駒のやうになり、他人のことにかまけて居た時分より百倍も多く自らのために勞することを、そして、幾多の奇怪な夢想妄想を後から〳〵と產み出すことを、知つた。餘りのことに、わしは、その取留なさ、物狂ほしさを獨り靜かに眺めようために、それらの妄想を帳面に書きつけて見ることにした。いつか、わが精神が、それを見て、自らはづかしと思ふやうになつて呉れゝばよいが。』

何たる心境の相似が、兩者の間に見出されることではございませんか！　一方は自己の表現に於て一段の細密を示して居りますに比し、他方はより端的に、より簡潔に心境を披歷して居ります。然し精神の進行に於ては何等の相違も認められません。强ひて相違を求むれば書法の點のみであります。卽ち一はその文字を左から右へ水平に書き、他は上から下へと垂直に書いてゐるのであります。それだけのことであります。而して兩者ともに、その述作が專ら淸朗

なる無爲の所産に他ならざることを私共に悟らしめ、且つ明澄にして、一點野心、情熱、虚榮、衒氣の跡を有せざる心境を私共に提示して居るのであります。

この坦懷にして、慾心なき精神によつてこそ、モンテーニュは、時間的、空間的にかくも遠隔なる多數の友を、吸引して居るものと、私は考へざるを得ません。私の知るところでは、フランスに於ても、また他の國々に於ても、モンテーニュ程に自尊心を脱却して居る人を、多く見ないのであります。備忘錄、個人日記、懺悔錄、その他これと同種のあらゆる作品を發表する人々は、多くの場合その動機がもつと不純であります。或る者は失脚の結果隱退した後、後世に對し自己を辯解する爲に己れの生涯を語るのでありますし、また或る者は單なる虚榮心から、自身の姿を永遠に殘さうと努めるのであります。彼等の悉くとは云はずとも、その大多數はこれに似た動機から筆を執るに至つたのであります。例へば、かの「箴言集」の著者として、餘りにも有名なるラ・ロシュフコーを御覽なさい。彼の頭腦の犀利であつたことに就ては、何人も疑を挾むことはできないと信じます。彼は、萬人周知の如く、十七世紀の貴族中、最も聰明なる一人でありました。フロンドの擾亂中に、立身の基を固むることを得ず、且つ自己の熱中する道に滿足を得ることができなかつた爲に、活動的生活を見限り、「教養ある人士間の談論」に逃避したのであります。私共はこれに就て何も彼に不服はございません。然し、彼の「箴言集」は、かくの如き經歷と、かくの如き心境との反映であります爲に、必然的に、一個の頗る複雜なる、頗る不純なる心理の諸の特徴を、吾々に提示するのであります。私共がこれを讀んで受けます、第一の、壓倒的の印象は、その多大の微妙なる眞理にも拘らず、「美望」の一語で云ひ表はされ得るのであります。ラ・ロシュフコーは立身出世を得なかつた爲に、嫉妬の眼を以つて、所謂「白眼」を以つて

世間を見ました。そして世間一般を蔑視することによつて、己れの不幸を慰撫したのであります。寓話の中の、狐が「これは熟れてゐない」と云つて葡萄の樹の下を立ち去つた話を想ひ起させるものがあるではありませんか。ラ・ロシュフコーは、人生に對して、常に歪んだ、先入主的の觀照しか與へなかつたのであります。

今一つの例を擧げて見ませう。それはジヤン・ジャーク・ルソーであります。彼は全く間然するところなき忠實さを以て、その自畫像を我々に與へたと主張して居ります。「懺悔錄」の冒頭から、宣言してゐる彼の言葉をお聞き下さい。

『いつでも最後の審判の瓠（らつぱ）の鳴りはためく時、私はこの本を手にして大審判者の前に進み出よう。私は聲高（こゑだか）に述べ立てよう。――これが私のした事、考へた事、又在つた通りのものです。……永劫の神よ、……願はくは私の周圍に我が同胞の無數の群を集めて、私の告白を聽かしめ、私の下劣さを悲しましめ、私のみじめさを恥ぢしめ給へ。彼等の各々をして、汝の帝座の下に、皆同樣の誠實さをもつて、順次に其の胸を打ち開かしめ給へ。然うした後に誰一人でも「私は其の人よりも立派なものでした」と、言ひ得るならば、言はしめ給へ。』

次で、十二章の長きに亘つて、己れを語つた後、彼は次の如く結んで居ります。

『私は眞實を話しました。……私に於ては、大膽に、憚る所なく斯う申し上げます、誰でも、私の稿を讀まないでも、その人自身の眼で私の性質、性格、道德、偏向、享樂、習慣を調べて、それで私を不誠實な人間と信じ得る者があるなら、その人こそ壓殺すべきものです。』

これ等の章句の美しさと、その筆力とには、『心ならずも魅惑せられる底のものがあることを、認めざるを得ません。然し乍ら、これは果して懺悔と申す可きものでありませうか？　眞の懺悔を期待して居りました我々としては、

何と申したら良いのでありませうか？　著者が我々に與へて居りますのは、彼の自我の高慢なる誇示ではありませんか？　彼は猶も次のやうに確言して居るではありませんか？。

『私はこれまでに先例のない、又今後に模倣者のあるまじき一つの企圖を懷いてゐる。私は我が同胞に、自然の儘を丸出しの人間一人を見せたいのだ。そして其の人間は私なのだ。私だけだ。私は自分の心を感ずる、そして人間といふものを知つてゐる。私は自分の見て來た人達のやうには造られてゐない。現在の人の誰もと同じやうに造られてゐないと確信する。私はそれら以上の者でなくても、少くとも異なつた者である。自然が私を嵌めた鑄型を割つて了つたのは、いゝ事だつたか惡い事だつたかは、此の本を讀み終つてからでなくては判斷が出來ない。』

他のすべての人間と異つてゐることを、かくまで高らかに宣言する人間が、人生と人間社會とに關して、我々を說得しようと望むとは、何たる嗤ふべき喜劇でありませう！

ラ・ロシュフコーも、ルソーも、また年代を下りまして十九世紀の諸家にしましても、大部分はこれと同樣の性格を示して居ります。これ等の主我主義者の群と較べます時、モンテーニュは、何たる素朴さ、何たる正直さ、何たる明朗さによつて美化せられてゐることでありませう！　ルソーがその「懺悔錄」を書くに當つて、自讃しました、

（永劫の神よ）汝の親ら視られた通りに、

私は自分の內面を暴露しました。

の一句は、當然モンテーニュにこそ、かやうな言辭を假初にも弄することのなかつたモンテーニュにこそ、歸す可きものなのであります。彼は例の如く愼み深く、次のやうに云つて居ります。

『わたしは皆が、此の書の中に、自然な、普段の、緊張も作爲もなき、單純なる風態に於けるわたしを見て呉れるやうに、と冀うてゐる。まつたく、わたしを、わたしは描いてゐるのである。わたしの缺點が、わたしの生れつきの風態が、こゝにはありのまゝに讀まれるだらう。唯いさゝか、それが世間樣に對して失禮にならぬやうにと、心したばかりである。』

更に彼は次のやうに附加して居ります。これは彼の心の高さを一段と示して居るに外ならないのであります。

『若しもわたしが、今尙ほ自然の原始的な掟の下に自由な生を娛しんで居ると云はるゝ、あゝいふ民族の間に生れたならば、それこそ大喜びで、餘す所なく、赤裸に、自分を描き出したことであらう。要するに、讀者よ、わたし自らがわたしの書物の內容なのである。こんなつまらぬ、こんな下らぬ內容のために、わざ〳〵お閒をつぶされるのは道理なきことである。では、さやうなら。』

ルソーの厚顏無恥と較べますと、何たる距りでありませう！　何といふ切々たる謙遜でありませう！　兩者共に自己を語つて居り乍ら、何といふ相違でありませう！　モンテーニュは己れを語り乍ら、唯の一瞬も、自分が人類の一員であることを忘れません。彼はこの關係に於てのみ、自己を我々に語つて聞かせるのであります。ルソーはこれと反對に、世人一般と相容れざる自己の肖像を我々に描いて見せるのであります。前者は人類なる大家族に屬して居ります。人は彼を一個の友人と、殆んど一人の兄弟と見做すことができるのであります。然るに後者は、彼自身の宣言によりますと、人類と何等の共通關係を持たぬ人間であります。思うてこゝに至りますれば、何故に寡默なる謙遜を持して居りますモンテーニュが、絕えず友愛を說いて止まざるルソーよりも、より多く我々を牽引するかを、了解す

ることは容易であります。「隨想錄」の著者のこの謙遜こそ、この誠實こそ、この率直こそ、この捨身こそは、私共を隨喜せしむるものでありまして、これは東洋の傳統的悟道と合致するものであります。

こゝで簡單に、私共の國に於ける悟りの觀念の概要を、お話させて戴きたうございます。私共が一般に「賢者」と申しますのは、我々の生活を攪亂する一切の人間的慾情を解脫して、安心立命の境地に到達した、達識の人を云ふのであります。人間はその生涯に於て多くの苦惱を味ひます。それは何故でありませうか？　種々の慾情、卽ち、愛、利益、野心、功名等に惑溺する故であります。それ故に、至上の福祉を獲得せんが爲には、先づ第一に、我々の身中に巢食ふ敵を擊ち破らねばなりません。この戰は必ずしも樂なものではありません、然し、この難關を越えざる限り靈妙なる安息の喜びを味ふことは、永久に不可能なのであります。就中、擊破するに最も困難な敵といふのは、盲目的な死の恐怖であります。何故ならば、我々の生活を蝕むことの最も多いのは、これであるからであります。ところが、丁度モンテーニュが、「哲學する目的は死に方を學ぶにあること」の章に於て、次のやうに云つて居ります。

『死を豫め思ふのは、自由を豫め思ふことである。死を學びえた者は、屈從を忘れた。』

この一句、簡潔の內に、實によく私共の考へを要約して居ります。地上の樂園の門扉は、この種の賢者にのみ開かれるのであります。その結果、日本に於きましては、賢者と云はれる人は、全くの隱者ではありませずとも、甚だこれに近いものであります。非人間的と申しても宜しいでありませう。何とならば、彼等は死を、人生の煩悶の解放と見做し、喜んでこれを迎へることが稀ではないのでありますから。日本に於いて、傑作の列に置かれて居ります文藝作品は、悉く、多少ともかくの如き心境を反映して居りますことを、私は斷言して憚りません。例へばかの「俳諧」

と稱する短詩の多くがそれであります。俳諧につきましては、その簡潔さが喜ばれ、フランスに於ても、同好者を出して居るかに存じます。日本の賢者達にとりましては、生と死とは一如であります。彼等は頑是なき小兒に等しき無頓著さを以つて、その無碍の精神を、赴く儘に、森羅萬象の上に逍遙せしめるのであります。靈感の導く儘に、彼等の享受する幾多の思想を、印象を、彼等は書き留めるのであります。かやうな事情から、日本に於きましては、「隨想錄」の如き文學形式が、より多くの技巧、構想、反省を要する藝術形式よりも、好んで開拓せられてゐるのであります。事實、文藝上の法則を餘りに小心翼々と遵守することは、往々にして作品の純粹を損ふものであり、かやうな作品は、もはや作家の野心を反映するに過ぎず、而してこれは最も忌むべき缺點となるものであると考へます。今一つ申し添へておきますが日本語で隨筆（au fil de la plume）と稱せられ、フランス語の essais 或は mémoires に該當します文學形式は、一つの文體を完成の域にまで發達せしめまして、これが他のすべての文學形式、小說、歷史、その他一般散文作品に、影響を與へる傾向を持つてゐるのであります。

私は先程、日本に於いては、賢人は隱遁者であると申しました。この點に就いて少しく所懷を述べさせて戴くことが、問題を明瞭にする爲に有效であると存じます。熱烈なる隱棲著述家は、西洋に於ても、東洋に於ても、相當の數に上つて居ります。これは隱棲が往々文學的感奮を助長するが爲であります。然し私の觀ますところでは、東洋の隱遁者と西洋のそれとの間には、著しい相違がある如く思はれます。私の故鄕であります遠い國々に於きましては、悟道に達せんが爲には、先にも御注意を喚起しました通り、人間的慾情を脫却することが、屢々勸められます。然し乍らこれは、實を申せば、社會の眞中に居りましては、容易に成就せられぬことであります。蓋し、社會の中に於いて

は、人は常にあらゆる世俗的羈絆に拘束せられまして、その爲に私共の心は、必然的に、無數の慾情や誘惑に惑溺するからであります。然るにモンテーニュその人が、魂の孤獨を稱讃して次のやうに云つてゐるではありませんか。

『……心を取りもどして自分の衷に引き入れねばならない。それこそ眞の孤獨であつて、市井の中央に於いても、王廷の眞中に於いても、均しく享樂せられ得る。唯、獨り離れてある場合には、より樂に享樂せられる。……他人とのあらゆる連繫から脱け出よう。ほんたうに獨りで暮すことが出來るやうに、心靜かにさういふ生活が出來るやうに、と精進しよう。』

かくの如き、孤獨への逃避は、とりわけ社交的であります西洋に於きましては、かなり稀有なことに相違ありますまい。これに反しまして、私共東洋人は、モンテーニュのこの勸告に、十分の意義を認めるのであります。私共の國に於きましては、俗世の煩瑣から完全に離脱する爲に、妻に對し、子に對する愛着を絶つ場合は、決して珍らしくないのであります。西洋人を驅つて、隱棲に趣かしむる動機は、全體的に見て、これとはかなり異つてゐる如く思はれます。東洋人は、幸福の强敵たる、邪惡の慾情を屏息せしめ、自己の征服へ出發する爲に、遁世するのであります。西洋人は、モンテーニュの場合は例外と致しまして、孤獨を求めます時、自己の中に擊破すべき何等の敵を持つて居りません。己れ自身を征服するといふ必要を全然感じて居ないのであります。彼は己れの善人であることを信じて居ります。然しこれは勿論誤謬でありませう。彼と社會との間に不和が生じますと、彼は必ず社會の咎となし、これを非難するのであります。浪漫主義の父、ルソーの考へ方がそれでありましたし、十九世紀に於けるその後繼者達の大多數も、彼を眞似て居ります。彼等がその所謂「象牙の塔」に逃避しますのは、墮落した社會の腐敗に對し、彼等の自我の純潔

を護らんが爲であります。或は、社會の戰に於て受けた何等かの傷を、靜かに撫摩する爲であります。或はまた、社會を嘲罵することによつて、復讐せんが爲であります。かゝる心境から、懺悔錄、備忘錄、日記、その他同種のあらゆる作品の發生することは、容易に理解することができます。これ等の作品は一種の復讐者とも謂ふ可き故意の外觀の下に、筆者の顏貌を示して居ることが、往々に見られるのであります。東洋人に在つては、隱遁は自己の否定であります。西洋人に在つては、多くの場合、自己の肯定なのであります。

私は東洋の傳統たる悟道の精神は、ルソー及びその一派のそれとよりも、モンテーニュのそれと、よりよく合致するものであると敢て信ずるものであります。ルソーは人間の生來の善を信じて居りました。モンテーニュも、また私共もこれを信じません。私共は人間を墮落せしむるものは社會であるとは考へません。それは私共の中に巢喰ふ慾情と自尊心との仕業であると考へます。私共が眞に幸福となり得る爲には、これ等の奸惡なる助言者等を沈默せしむることが必要であります。それ故に、私共は慾情と偏向との完全なる抑壓のみが、惠まれたる稟質の人をして、善と惡との眞の辨識に到達することを得しむるものであると信ずるのであります。かゝる境地に至つた人は、絕對に惡德に墮する怖れなく、心の儘に自在に振舞ふことを得るのであります。或る意味に於ては、私共は確かに、モンテーニュと同樣人間性の善を信じます。然し人間の生來の善を信じないのであります。根本的の差異がそこに在るのであります。申す迄もなく、東洋の悟道の素因の中には、佛敎の顯著なる影響を見出すことができるのでありますが、モンテーニュはこれに關しては全く無關係でありました。彼の時代に於いては、東洋と西洋とは、互に相手の生活條件に無智であつたのでありますから、彼に關して牽强附會の論を立てることは、避けなければなりません。然し乍ら、私共はいか

にしても、彼の述作の中に、私共自身の相貌の目馴れた特徴の數々を、見出さないでは居られないのであります。

往々、批評家が彼を目して懐疑家と呼び、彼が努力を蔑んだことを責めて居りますことは、私も知つて居ります。若しかゝる非難が正しいものでありますならば、これは私共にも當る非難であります。東洋の賢人も、モンテーニュと均しく、孤獨と心の安住とを、人生の最終の理想と定めて居ります。然しこの非難は果して根據あるものでありませうか？　私は疑を持ちます！　一體私達人間の精進の目的はモンテーニュが描いて見せて居りますやうな、安心立命の心地を實現することでなくて、果して何でありませう？　而して、モンテーニュ　その人も、この境地を實現する爲に、精進をしなかつたでありませうか？　否、確かにして居ります。「隨想錄」の中に、彼は殆んど神に近き境地に達した一賢人の十全の姿を示して居ります。こゝに至つては、人間の區々たる努力の如きは、もはや殆んど問題ではありません。私にとりましては、彼の述作はフランス文學の、最も崇高なる記念碑であります。私共の眼には、これを見出すことは、哲學または科學の或る新方法を、知識の上に加へますことより、より重大なことゝ思はれます。

結論として今一言、附け加へますことをお許し下さい。世人は往々、キプリングの「東は東、西は西」の一句を引用致します。これは、東洋の精神と西洋のそれとの間に、越え難き深淵の存在することを確認したものであります。かほどに頻繁に繰返されますこの格言は、何かの眞理を含んでゐるに違ひありません。尤も、東と西との差異が無かつたとしましたら、世界は誠に單調のものであつたことゝ思ひます！　然し乍ら、モンテーニュの如き人物が存在しましたことは、この二つの極端が、相到り、相愛し得ることを、十二分に證明するものであります。而してモンテーニュ自身も、次のやうな感懐を述べました時、自ら世界人たることを感じてゐたのではありますまいか？

『ソクラテスがさう云うたからではなく、本當に是がわしの意見であるから申すが、（それに、恐らくこの言葉には多少の誇張が含まれて居ようけれども、）わしは、凡ての人をわが同國人と思うて居る。そして、波蘭土人も佛蘭西人同様に抱くのである。つまり、同國の誼みを世界を同じうする誼みの次に置くのである。』